

科目名 美の考察

必修 【両コース共通】

開講年次：1 年次 1 期

講義

単位：2 単位

■科目のねらい

「衣の造形」をなぜ美術の場で研究するのか。それは、美術の場においては創作者が自ら「美」の発見を行いながら創作を行っており、服飾の場においてもその意識の育成が必要であるという考えからである。

ここで重要なのは、今自分が保有している美の基準に頼るのではなく、「美」の幅の広さや深さを獲得することであり、そのための柔軟な姿勢である。

では、「美」の発見はどこで成されるのか。それは日常のありとあらゆる状況やジャンルにおいてである。そこで我々は、確定された芸術作品やデザイン物の美の基準を“なぞる”のではなく、日常において、自らの意志で、視点で「美」の発見を行い、感性の具現化に繋げる。この授業では、意識の化学変化といえるそのきっかけや気づきを、授業担当者とともに研究していく。

「美」を発見することから始め、それをそれぞれの創作の礎とし、また活性剤としていく。そしてここで獲得されなければならないのは、美学のための美ではなく、創作の道筋を確かなものにするための「美」の力なのである。

■到達目標

ゼロからの創作のための基礎体力、つまり「美」を発見する能力を身につけること。そして発見された「美」を言語化し、他者に伝えるために「感性の理論」を獲得することを目標とする。

■担当教員

瀬古 徹

■修了認定・学位授与の方針と該当授業科目の関連

「創作表現コース」、「3D デジタルモデリングコース」共に修了認定に必要な科目である。「創作研究Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ」、「創作技法研究Ⅰ、Ⅱ」、「修了制作」に向けて、研究の基礎体力ともいえる創作者自身の「美」の基準を、理論的、実践的に獲得していき、「衣の造形」作家として、制作の姿勢と作品の水準の向上を図り、修了制作におけるプレゼンテーション、インスタレーション、パフォーマンスと言った表現への足がかりとすることを目的とする。

■授業計画・内容

	授 業		
	内 容	目 標	準備
第 1 回	・『美の考察』について ・「衣」の造形表現の可能性 ・「言葉」を、手を使い書き止め、声に出して伝えることの意味、つまり「ノートを取る」こと、「直接」のプレゼンテーションの意義 ・「研究倫理に関して」共に考えながら始めて行く（主に、ディフェンスとして） 身体－①「美術における身体表現」	諸々、イントロの後、 我々はここで「生きている造形表現」を行うこととなる。 先ず、身体は主役と成り得るのか。物質との係わりは。 形態に重きを置き、服飾表現を軸に造形表現全般に広げ 「身体」についての問いかけを行う。	筆記用具、 ノート
第 2 回	身体－②「虚構か、現実か」	マンガ、アニメーションにおける“肉体なき”身体について考える。 (各自、マンガ、アニメーション作品のプレゼンテーション)	筆記用具、 ノート、PC
第 3 回	身体－③「かわいいー1」	例えば、ある表現を受動して、なぜ「かわいい」と感じるのか。それは、その作品にあるのか、鑑賞者の中にあるのか。そもそも造形における「感情の表現」とは何か参考；「ネオテニー」 (各自「かわいい」もの、ことのプレゼンテーション1回目)	筆記用具、 ノート、PC
第 4 回	身体－③「かわいいー2」	「視点」、「切り口」の強化、強調。シナリオの解体、読むのではなく観るものに再構築する (各自「かわいい」もの、ことのプレゼンテーション2回目ブラッシュアップ)	筆記用具、 ノート、PC
第 5 回	言葉①「食レポート」	文章のみによる食のレポート。いかに美味しさは「伝わる」か。「見立て」について考える (各自 PC を使わない「食レポート」、プレゼンテーション)	筆記用具、 ノート

第6回	言葉②「詞・詩-1」	感情を、そのための状況をいかに言葉で「伝える」か。また、言葉はリズムによって「活きる」のか。 (各自 PC を使わない「詞・詩」のプレゼンテーション)	筆記用具、ノート
第7回	言葉②「詞・詩-2」	「書かない」ことで「書き」、「言わない」ことで「言う」。余白を考える。 (PC を使わない「詞・詩」のプレゼンテーション 2 回目ブラッシュアップ)	筆記用具、ノート
第8回	「好き」について①「私的基準」	自分の「好き」なものの・ことに関して説明する。まずは自らの基準で。「趣味」とは何か。 (各自「好き」なもののプレゼンテーション①)	筆記用具、ノート、PC
第9回	「好き」について②「他者的基準」 —「他者的」と「客観的」の違い—	多くの人が「好き」なものの・ことに関して説明する。他者的、或いは社会的基準で。流行とどのように関係していくか。(各自「好き」なもののプレゼンテーション②)	筆記用具、ノート、PC
第10回	「好き」について③「客観的基準-1」	自分の「好き」なものの・ことを他者、或いは社会において強固なものとしていくためのシステムを考える。 (各自「好き」なものの強化のためのプランニングのプレゼンテーション)	筆記用具、ノート、PC
第11回	「好き」について④「客観的基準-2」	自分の「好き」なものの・ことを他者、或いは社会において強固なものとしていくためのシステムを使い「表現」していく。 (各自「好き」なもののプレゼンテーション③)	筆記用具、ノート、PC
第12回	表現の強さ①「クリエイターの魅力の分析-1」	自分が魅力を感じる創作者(デザイナー、アーティスト)の魅力を分析する。造形力、社会的影響力、物語性を含めた人物力、人格、思想等なぜその表現は「強い」のかへ意識を向ける。 (各自、好きなクリエイターについてのプレゼンテーション)	筆記用具、ノート、PC
第13回	表現の強さ②「クリエイターの魅力の分析-2」	名作の「作品要素」に関して考察する。 (各自、好きなクリエイターの「作品要素」についてのプレゼンテーション)	筆記用具、ノート、PC
第14回	表現の強さ③「作品」	自らの表現に関して分析し、方向性を画策する。 (各自の研究テーマの強化のためのプランニングのプレゼンテーション)	筆記用具、ノート、PC
第15回	レポート及びプレゼンテーション 表現の強さ④「情報の調整」	1)それぞれの研究科における研究テーマの内容のレポートを作成し、プレゼンテーションを行う。 2) アンチグローバル、ローカルな位置の肯定。あえて“閉じる”ことによって得る創作者としての「強さ」を考える	筆記用具、ノート、PC

■研究のための時間外準備

第1回 受講後；

- 1) 記録の身体化 →今回のみならず今後ずっと創作・表現者としてアナログの記録方法に拘る。逆の言い方をすると、安易な、考察のない、表層的な、利便性だけを理由とした記録方法(パッドやスマートフォンによる撮影等)を禁止する。ノートとスケッチブックによる実践を行い、「ことば」や「かたち」の意味を問いながら記録をして行く習慣をつける
- 2) それぞれの表現とシンクロした「マンガ」、または「アニメーション」の画像の準備。それらの中に描かれている人体の分析的模写ドローイングなど 90分

第2回 受講前；それぞれの表現とシンクロした「マンガ」、または「アニメーション」の画像の準備。それらの中に描かれている人体の分析的模写ドローイングなど プレゼンテーションとそのディスカッション(講評とフィードバックへ) 90分

受講後；「かわいい」と心動かされる「もの」の画像の準備。それらについての分析レポートの作成 90分

第3回 受講前；「かわいい」と心動かされる「もの」の画像の準備。それらについての分析レポートの作成 プレゼンテーションとそのディスカッション(講評とフィードバックへ) 90分

受講後；意識の絞り込みの上で、再び「かわいい」と心動かされる「もの」の画像の準備。それらについての分析レポートの作成 90分

- 第4回 受講前；意識の絞り込みの上で、再び「かわいい」と心動かされる「もの」の画像の準備。それらについての分析レポートの作成、そのブラッシュアップ、90分
受講後；ステレオタイプなものに関するリサーチ 60分
雑誌等での食のレポート記事を読んでおく 90分
- 第5回 受講前；「食」後のレポート文の作成。プレゼンテーションとそのディスカッション（講評とフィードバックへ）120分
受講後；感覚化した言葉を集め、組み立て、崩し、再構成し、削り、活かし、強調し、或いは弱体化させ、伸ばし、尖らせ、凹ませ、詩・詞をつくる 120分
- 第6回 受講前；詩・詞をつくる、プレゼンテーションとそのディスカッション（講評とフィードバックへ）120分
受講後；「書かないこと」、「言わないこと」等、大きな含みを持つ言葉を意識し、言葉と言葉の間に生まれる「余白」を認識した上で再び詞・詩をつくる 120分
- 第7回 受講前；「書かないこと」、「言わないこと」等、大きな含みを持つ言葉を意識し、言葉と言葉の間に生まれる「余白」を認識した上で再び詞・詩をつくる 120分
プレゼンテーションとそのディスカッション（講評とフィードバックへ）90分
受講後；自分の作品分析の文章記録 60分
- 第8回 受講前；1)自分の趣味を含めた「好きなこと・もの」の素材準備 2)「好きなこと・もの」の紹介文作成 講評とそのディスカッション（フィードバック）90分
受講後；「主観」の客観的分析 60分
- 第9回 受講前；前回紹介した「好きなこと・もの」を他者的、社会的視点で「分析」した文章の作成 講評とそのディスカッション（フィードバック）90分
受講後；「社会性」と「主観」の比較分析 60分
- 第10回 受講前；自分の「好きなこと・もの」を他者に強固に伝える（説得する）方法を模索した文章の作成-1 講評とそのディスカッション（フィードバック）90分
受講後；「主観的」と「客観的主観」の区別を考える 45分
- 第11回 受講前；自分の「好きなこと・もの」を他者に強固に伝える（説得する）方法を模索した文章の作成-2 講評とそのディスカッション（フィードバック）90分
受講後；「主観的」と「客観的主観」の区別を考える 45分
- 第12回 受講前；自分の魅力を感じる（或いは敬愛する）創作者（ジャンルは問わない）に関してのリサーチ、プレゼンテーションの準備 講評とそのディスカッション（フィードバック）120分
受講後；創作者、表現者としての「強さ」の分析 45分
- 第13回 受講前；自分の魅力を感じる（或いは敬愛する）創作者の作品に関してのリサーチ、プレゼンテーションの準備 講評とそのディスカッション（フィードバック）120分
受講後；作品の「強さ」の分析 45分
- 第14回 受講前；自分の研究テーマプランの“再”作成 講評とそのディスカッション（フィードバック）120分
受講後；自分の研究テーマプランの調整 60分
- 第15回 受講前；自分の研究テーマの再作成 講評とそのディスカッション（フィードバック）90分
受講後；「情報の調整」に関して考察、方法論の模索 90分

■教科書・参考文献等

参考文献

中尾喜保著『新版／生体の観察』 メヂカルフレンド社
中尾喜保、宮永美知代著『美術解剖学アトラス』 南山堂
ウィリアム・A・ユーイング著『THE BODY』那須孝幸、渡辺純子訳 美術出版社
STEPHEN LONGSTREET: *the Figure in Art*. BORDEN PUBLISHING COMPANY
ロラン・バルト著『明るい部屋一写真についての覚書』花輪光訳 みすず書房
ロラン・バルト著『表徴の帝国』宗左近訳 ちくま学芸文庫
アメリカ・アナレス『なぜ、これがアートなの？』福のり子訳 淡交社

■成績評価基準と方法

レポートとプレゼンテーションのかたちで評価する。

試行錯誤を経て深く絞り込んだ「視点」、そこからの「方法論」を持ったものを高評価の対象とする。形式的な（あるいは、表面的な）技巧のみのプレゼンテーション行った場合は、再考を要求しやり直しをしてもらう。

課題・制作への取り組みの姿勢（経緯）	25%	ex. プレゼンテーションのシナリオをメインとしたレポート
授業内試験等、作品、レポート、プレゼンテーション（結果）	75%	ex. プレゼンテーション
外部専門家評価	0%	

■研究倫理への取り組み

担当 瀬古；

初回の授業にて「研究倫理」に関する提案を行う。今授業では主に制作者、表現者の専門職として起こり得るであろう問題点を大まかに想定しつつ、そのための「ディフェンス」としての姿勢（構え）について提案したい。この「ディフェンス」としての姿勢とは、それが作者の「創作の根幹」を表すものであると同時に、それ自体が「創作の証明」に繋がるもの、と思っている。言い換えると、創作の場において「concept（基本概念）」を表すものが、社会的には「証拠」として成立させることが可能なのではないかと考えている。

提案の後、そのことに関する院生それぞれの実践を経て、改善、強化を図って行きたい。

■学生へのメッセージ

講義内容を一つの契機と考え、創作における自己の美の基準の構築に役立てること。

科目名 映像表現

必修【両コース共通】

開講年次：1年次1期 集中

演習

単位：1単位

■科目のねらい

現在、スタンダードな情報伝達手段となった映像は様々な分野で活用されている。この授業では当たり前のように触れてきた映像について、制作体験と演習を通してあらためて考察することに主眼を置く。スタジオ環境を活用し技術としての側面と表現としての側面の両方からアプローチすることで、専門領域やコースを横断しながら、それぞれの表現に応用・展開していくこととなる。

■到達目標

創作表現コース：

- 1) 作品としての映像表現について技術と考え方を得ることが可能となる。
- 2) 表現を支え・伝えるための手段としての映像について技術と考え方を得ることが可能となる。

3D デジタルモデリングコース：

- 1) 空間シミュレーションにおける映像表現の基礎となる技術と考え方を得ることが可能となる。
- 2) 表現を支え・伝えるための手段としての映像について技術と考え方を得ることが可能となる。

■修了認定・学位授与の方針と該当授業科目の関連

修了認定に必要な科目である。

本科目は「創作表現コース」「3D デジタルモデリングコース」に共通する映像表現についての基本的な考え方と技術を通して、自身の表現に結び付けていくことを目標とする。

■担当教員

千代崎寛

■授業計画・内容

	内 容	授 業 目 標	準 備
第1回	オリエンテーション・授業概説と導入 課題：テーマ1「日常の記録-1」 演習①カメラワーク	ビデオ、シネマカメラなど機材の特性を知る。基礎的な考え方（フレーム、フレームレート）。ロケーション撮影での配慮（著作権・プライバシー）について。	DSRC（デジタル一眼レフカメラ）、PC、資料ノート
第2回	課題：テーマ1「日常の記録-2」 演習②レンズワーク	レンズの特性を知る 画角、構図とフレーミング、ブレと動き	
第3回	課題：テーマ1「日常の記録-1・2」プレゼンテーション 課題：テーマ2「ショートムービー-1」 演習③スタジオワーク（ライティングテクニック-1）	スタジオでのライティングについて考察する。映像編集、絵コンテ、ストーリーボード。ロケーション撮影での配慮（著作権・プライバシー）について確認と修正。	
第4回	課題：テーマ2「ショートムービー-2」 演習④スタジオワーク（ライティングテクニック-2）	絵コンテ、ストーリーボードからスタジオでの撮影企画書の作成。撮影許可申請を含めたプランニングについて。	
第5回	課題：テーマ2「ショートムービー-1・2」プレゼンテーション。 課題：テーマ3「作品制作-1」 演習⑤スタジオワーク（ライティングテクニック-3）	映像編集からモンタージュ（映像における文法）タイムラインを考察する	
第6回	課題：テーマ3「作品制作-2」 演習⑥サウンドワーク（機材と環境）	MA・音声・録音、マイク、ミキサー、収録と編集、ナレーションとテロップ。音源などの著作権について。	
第7回	課題：テーマ3「作品制作-1・2」プレゼンテーション。 課題：テーマ4「プロジェクション-1」 演習⑦空間演出（舞台、セット）	プロジェクション（応用編）映像とインスタレーション（展開編）。展示空間での配慮と方法について。	
第8回	課題：テーマ4「プロジェクション-2」 課題：テーマ4「プロジェクション-1・2」プレゼンテーション まとめ 応用と展開	映像表現の応用・展開から、専門領域への接続を図る。クレジットなどの表記に關しての確認と修正。	

■研究のための時間外準備

・〔準備研究〕＝予習・受講前 ・〔継続研究〕＝復習・受講後 ・集中授業のため1回分を1・2回と表記

第1・2回 〔準備研究〕：自身が触れてきた映像表現の（鑑賞、撮影・編集など）について俯瞰するための資料ノートを作成する。

〔継続研究〕：課題 テーマ1「日常の記録-1・2」制作。資料ノートの整理、レファレンスとして活用するための準備。自分のカメラを使いこなせるよう日常の場面で積極的に活用する。

第3・4回 〔準備研究〕：課題 テーマ1「日常の記録-1・2」プレゼンテーション準備。課題 テーマ2「ショートムービー-1・2」のためのリサーチ。資料ノート整理、レファレンス整理。

〔継続研究〕：課題 テーマ2「ショートムービー-1・2」制作。制作プロセスの記録資料準備。スタジオでの撮影企画書作成

第5・6回 〔準備研究〕：課題 テーマ2「ショートムービー-1・2」プレゼンテーション準備。課題 テーマ3「作品制作-1・2」のためのリサーチ。資料ノート整理、レファレンス整理。

〔継続研究〕：課題 テーマ3「作品制作-1・2」制作。制作プロセスの記録資料準備。

第7・8回 〔準備研究〕：課題 テーマ3「作品制作-1・2」プレゼンテーション準備。課題テーマ4「プロジェクト-1・2」のためのリサーチ。資料ノート整理、レファレンス整理。

〔継続研究〕：制作プロセスの記録資料を継続して活用する。

■教科書・参考文献等

授業内容に応じて適宜配布または提示する。

■成績評価基準と方法

授業は作品の発表とディスカッション、フィードバックが主な内容であり、そこに短時間の演習を含めた形で進めていく。課題である作品制作（企画・撮影・編集）は授業以外の時間を活用することになる。また、レファレンスや制作プロセスの記録は日常的に継続していかなければならない。この科目での成績評価の基準は結果としての作品ではなく、その制作プロセスの質を評価する。

課題・制作への取り組みの姿勢（経緯）	80%	エスキースと制作プロセスを記録したノート、レファレンス資料の質と量による
授業内試験等、作品、レポート、プレゼンテーション（結果）	20%	作品とプレゼンテーションによる
外部専門家評価	0%	

■研究倫理への取り組み

担当 千代崎；

特に映像表現における倫理観（感）に関しての“意識”と“考え方”に重点を置く。実際の制作を通じて Input（撮影段階）から edit（編集段階）を経て、output（発表段階）に至るまでの様々なケースについて考察していく。

■学生へのメッセージ

過去に“観た”イメージが、現在の創作活動の基盤となる。“みた”ことが無いものは“みる”ことが出来ない。

※集中授業として実施する。授業日程についてはオリエンテーション時に相談し決定する。

※コースを問わず DSRC（デジタル一眼レフカメラ）は必須となるので所持することが望ましい。

科目名 創作技法研究Ⅰ

必修【創作表現コース】

開講年次：1年次1期

演習

単位：4単位

■科目のねらい

この授業では、試行錯誤をしながら「直接」の「衣」の創作を行っていく。

すでに学部で行ってきた設計図先行の造形の基礎の上に、あえてそれを無意識下に置き、「解放」の創作を行うことを目的とする。ここで研究されるべき技法とは、創作を完成させる方法としての技法ではなく、様々な角度から創作の発動を促すための技法である。従って、ここで行われる研究は、すべて創作実践の上に展開して行く。

・モデリング制作法

—立体造形の可能性を探る—

「表現者」として必要な経験は、圧倒的な量の蓄積である。ひとつの成功の裏には膨大な量のトライ&エラーが欠かせない。プロフェッショナルと素人の違いはここにある。この科目ではひとつの課題に時間をかけ、ひとつの答えを導き出すための時間と労力を惜しまない情熱を育むことと、圧倒的な量をこなすことを目的とする。

また、デザインやアートの定義はカタチの美しさと思われがちだが、もっと大きな観点から考える「ベースとなる思想」が必要だということを理解することで、将来の創作活動に役立てる。

修了制作時において、エスキースの重要性の理解と、核となる造形力を身につける。

今回は着彩を施したドローイングを描く。

[担当：桐山征士 14回]

・マテリアル演習

金属を用いて様々な造形体験をする。様々な素材を知り、基本的な技術を身につけることで表現の幅を広げる。ただし、素材や技法に束縛され、発想の幅が狭くなることは避ける。

服飾において、アクセサリは必須アイテムである。後期のモデリング制作で行うアクセサリ制作のエスキースが目的である。修了制作時の造形の幅を持たせることが狙いである。

[担当：桐山征士 6回]

・マテリアル演習

「衣」の造形の、ある時は物質的出発点であり、ある時は構造的出発点であり、又感性的出発点であるマテリアルとそこからの創作研究を行う。「創作技法研究Ⅰ」においての様々なマテリアルの可能性の探求をもとに、既存の衣服素材としての布に縛られることなく、2次元（平面）から3次元（立体）への展開、そして反復を特性として持ち合わせたマテリアルの体験的探求とそのマテリアルからの「衣」形態（フォルム）の造形的可能性を求める。また、従来の衣服素材であるテキスタイルとの相互の関係性を探り、協調関係における

「衣」の造形を行いながら「創作技法研究Ⅰ」の継続と発展を行う。

[担当：田口雅子 7回]

・作家研究

（オムニバス、集中）

現在の「衣」の造形作家の造形的な視点、社会に於ける表現の可能性などの研究とそこからの構想法の研究を行う。

[担当：瀬古徹 3回]

以上の4つの視点を縦横に行き来しながら、創作の研究を進行して行く。

■到達目標

何もないところから出発し、その造形すべきものの芯をとらえ、自ら方法を模索し、素材に関しての試行錯誤を繰り返しながら、すべてを同時進行で行う創作能力を養う。

■修了認定・学位授与の方針と該当授業科目の関連

修了認定に必要な科目である。

本科目は創作技法研究Ⅱ、創作研究Ⅱ、Ⅲ、および修了制作に向けて、創作者として必要な創作に費やすトライ&エラーを含めた圧倒的な「量」の経験、表層的なカタチの美しさに止まるのではなく「ベースとなる思想」の必要性の理解（モデリング制作法）、素材の物質的特性体験からの創作方法の研究（マテリアル演習）、「衣」の歴史の変遷を辿り、そこに展開される現代の衣の表現の源泉としての素材や表現技法の探求（古典技法研究）、プロフェッショナルとしての人、作品、そして「今現在」行われている創造からの直接的な感受、発見（作家研究）等を通して、「衣の造形」作家としての制作姿勢の基盤づくりとその作品水準の向上を図り、修了制作におけるプレゼンテーション、インスタレーション、パフォーマンスといった表現への足がかりとすることを目的とする。

■担当教員

桐山征士、田口雅子、瀬古徹

■授業計画・内容

	授 業		そ の 他
第 1 回	▼モデリング制作法 課題説明 コンセプトの起案 (桐)	▼マテリアル演習 ①脱“衣”素材 マテリアルの限らない可能性 金属の解説 金属加工 切る、曲げる、削る、穴をあける (桐)	研究計画提出 →確認、面接 研究テーマ
第 2 回	〃 コンセプトのディスカッション① (桐)	エスキース (桐)	
第 3 回	〃 コンセプトのディスカッション② (桐)	エスキース (桐)	
第 4 回	〃 コンセプトのビジュアル化① (桐)	▼マテリアル演習 ①第 2 の皮膚としての「布」の可能性(導入) →-1「繊維を纏う」 (田)	
第 5 回	〃 コンセプトのビジュアル化② (桐)	② 〃 →-2「織物を纏う」 (田)	
第 6 回	〃 エスキース (桐)	③ 〃 →-3「色を纏う」 (田)	
第 7 回	エスキース (桐)	④ 〃 ①(展開) →-1 素材からの表現 (田)	
第 8 回	エスキース (桐)	▼作家研究 テーマ①素材と「自然」=「有機的」な形態(フォルム)との関連性 (瀬)	
第 9 回	エスキースの完成 (桐)	〃 テーマ②「伝統」の構造的解釈に基づいた創作研究 (瀬)	
第 10 回	ドローイングの情報収集 (桐)	〃 テーマ③「身体のあり方」への挑戦としての創作研究 (瀬)	
第 11 回	下絵制作 (桐)	エスキース (桐)	
第 12 回	下絵制作 (桐)	エスキース (桐)	
第 13 回	着彩 (桐)	エスキース (桐)	
第 14 回	着彩 完成 (桐)	▼マテリアル演習 ⑤第 2 の皮膚としての「布」の可能性① (展開)-2 素材からの表現 (田)	
第 15 回		⑥第 2 の皮膚としての「布」の可能性② (展開)-3 素材からの表現 (田)	
第 16 回		⑦第 2 の皮膚としての「布」の可能性③ (展開)-4 素材からの表現 (田)	

■研究のための時間外準備

・モデリング制作法

- 第1回 デザインとアートの違いについて考察する。
第2回のディスカッションでフィードバック。準備研究 120 分
- 第2回 コンセプトの情報収集。コンセプト確立の準備。
第3回のディスカッションでフィードバック。準備研究 60 分
- 第3回 コンセプトの情報整理及び分析。
第4回のディスカッションでフィードバック。準備研究 60 分
- 第4回 コンセプトのプレゼン準備。第5回のディスカッションでフィードバック。準備研究 120 分
- 第5回 イメージボード作成準備。コンセプトの準備。
第6回のディスカッションでフィードバック 120 分
- 第6回 数のエスキース。第7回の制作アドバイスでフィードバック。準備研究 60 分
- 第7回・第8回 第8回、第9回の制作アドバイスでフィードバック。継続研究 120 分
- 第9回 第10回の制作アドバイスでフィードバック。継続研究 120 分
- 第10回・第11回 問題点の洗い出しをする。
第11回、第12回の制作アドバイスでフィードバック。継続研究 60 分
- 第12回 下絵の精度を上げる。第13回の制作アドバイスでフィードバック。継続研究 180 分
- 第13回・第14回 着彩の実験を繰り返す。
今後の制作や修了制作のアドバイスでフィードバック。継続研究 180 分

・マテリアル演習（桐山）

- 第1回 第1回で使用した工具や機械の使用法を練習する。〔継続研究〕120 分
- 第2回 コンセプトを立案しておく。〔準備研究〕120 分
- 第3回 コンセプトを煮詰める。〔準備研究〕180 分
- 第11回 数のエスキースを行う。〔準備研究〕60 分
- 第12回 質のエスキースを行う。〔準備研究〕120 分
- 第13回 後期作品制作、修了制作に向けての作品構想として授業内容を整理しておく。〔継続研究〕120 分

・マテリアル演習（田口）

授業は実験的要素がある。材料が持つ特性について考え、表現することを試み、その目的と結果について説明ができるよう準備を行う。そのため、第4～6回目の授業後には必ず作品の観察を行い、表現方法の考察を行う。

- 第4回 授業前：布の構造について復習する。また、繊維・糸・布と衣服との関係について考察し、どのような材料があるのか調査する。200 分
授業後：授業を通して得られた内容を検証し、まとめる。100 分
- 第5回 授業前：織ることを想定し、既存の枠にとらわれず糸・紐状のものを探し準備する。45 分
授業後：授業を通して得られた内容を検証し、まとめる。100 分
- 第6回 授業前：布の彩色についてリサーチし、彩色について考察する。40 分
授業後：授業を通して得られた内容を検証し、まとめる。100 分
- 第7回 授業前：1～3回の授業のまとめをし、テーマを設定した布の制作をするためのリサーチを行う。
テーマについて具体的に説明し、その後制作ができるよう材料などの準備をする。100 分
授業後：制作計画を行う。
- 第14回 制作前：テーマを表現する方法を検討し、より具体的にするための方法を考える。100 分
授業後：授業を通して得られた内容を検証し、まとめる。100 分
- 第15回 授業前後：リサーチをする。
制作、調査含め材料の可能性について考察し、試すことから発見をする。100 分
- 第16回 授業後：制作により得られた内容を伝えるという観点から効果的にまとめる。150 分

・作家研究

- 1) 「作家」の作品及び活動に関してのリサーチ〔準備研究〕90 分×3 回
- 2) 1) に基づく研究ポイントの準備、質問事項の準備〔準備研究〕45 分×3 回
- 3) 「作家」の作品及び活動に関しての客観的分析〔授業終了後まとめ〕60 分×3 回
→授業時に「作家」とのディスカッションによるフィードバック
-

■教科書・参考文献等

参考文献

・モデリング制作法

尾川 宏著『紙のフォルム』 求龍堂

・マテリアル演習(桐山)

金属の素顔にせまる 住友金属テクノロジー株式会社・編著

溶接法 職業訓練研究センター・編

工作マニュアル ジャパンマシニスト社

・マテリアル演習(田口)

Mabel Ross: *the essentials of Yarn Design for handspinners*. Mabel Ross

Ann Sutton&Diane Sheehan: *IDEAS IN WEAVING*.

Sarah E.Braddock AND Marie O' Mahony: *Revolutionary Fabric for Fashion and Design*. Thames&Hudson

The Textile Design Book A&C Bkack

藍から青へ 建築資材研究所

糸から布へ 日貿出版社

■成績評価基準と方法

技法研究という名称の授業ではあるが、ただ既存の衣服制作技法の“なぞり”は評価しない。体験する様々な技法は、飽くまでも創作そのものの出発点であり、既存の創作概念を打ち破るものでなくてはならない。従って、そのための解放に向かう創作姿勢に評価の重きを置くこととなる。

【モデリング制作法】

各自の研究テーマに対する独自の視点とその体现。美術作家である教員とのディスカッションを通して、思考の密度をどこまで掘り下げられるかがポイント。自分の研究テーマをどこまで具現化できるか。造形としての美しさをどこまで追求できるか。

課題・制作への取り組みの姿勢(経緯)	50%	独自の視点と思考の密度の高さ
授業内試験等、作品、レポート、プレゼンテーション(結果)	50%	各自の研究テーマに対する具現化のレベル。
外部専門家評価	0%	

【マテリアル演習(桐山)】

制作への積極的な取り組み。完成度の高さ。

課題・制作への取り組みの姿勢(経緯)	50%	加工法の理解 精度 集中力 こだわり
授業内試験等、作品、レポート、プレゼンテーション(結果)	50%	作品の完成度(技術力ではない)
外部専門家評価	0%	

【マテリアル演習(田口)】

課題に取り組む姿勢と作品、プレゼンテーション、レポートを評価する。テーマ設定から制作に至る中での、発見、考察について反映されていること。

課題・制作への取り組みの姿勢(経緯)	50%	自ら考察し、材料の準備や、狙いを持って取り組むための準備と質があるか
授業内試験等、作品、レポート、プレゼンテーション(結果)	50%	授業内プレゼンテーション、最終提出レポートの内容
外部専門家評価	0%	

【作家研究】

作家のコンセプトを「読み」、自分をそこに置き、その作家の構想方向を借りながら制作プランを練り上げる能力、そしてそれをプレゼンテーションする能力を評価対象とする。

課題・政策への取組の姿勢(経緯)	30%	作家に関するリサーチ、それに基づく授業内での質問等ディスカッションによる
授業内試験等、作品、レポート、プレゼンテーション(結果)	70%	作家のコンセプトの解釈、それと自分研究との比較、それらのレポートによる
外部専門家評価	0%	

■研究倫理への取り組み

・モデリング制作法、マテリアル演習 担当 桐山；

自らの研究発表(彫刻家としての展示会等)を通して、模倣とオマージュの違いを明確にし、法的な著作権「意匠権」にとどまらず、倫理的な著作権に関して考察していきたい。

模倣(真似る・流行を追う・学習や練習を目的とする)とオマージュ(尊敬や賞賛の気持ちを込めて発展させる・既存の作品や表現を参考にしながらも、新たな創造性を加える)は、どちらも創作活動において重要な要素だが、意図や目的を明確にすることで、より効果的に活用する。

・マテリアル演習 担当 田口；

素材の可能性を追求することを通して、これまでの概念の見直しと新たな視点の発見をしていきたい。

・作家研究 担当 瀬古；

本授業はプロフェッショナルのクリエイター、デザイナーに直接授業を行なってもらうものである。従って、本人の肖像権、制作された作品(製品)の著作権(版権)、それらを出版物等に掲載したものに対する二次的著作権等様々なことが考えられるが、受講に際してはそれらに最大限の配慮を行う必要があると考えている。

当然だが、授業担当者の許可なくしてスマートフォンやタブレット等での撮影は禁止である。特に、観光旅行の様な意識での受講は絶対に許されるものではない。一期一会の緊張感の中での受講があつてこそ何歩か(或いは、何万歩か)先に行く先輩クリエイター達から得るものがあるのではないだろうか。

■学生へのメッセージ

授業時間は飽くまでも、課題確認、作品講評の時間であり、当然それ以外の自習時間のそれぞれの使用方法が問われることとなる。この自習時間(=創作時間)の積極的な使い方を考えておくように。

科目名 創作研究Ⅰ

必修【創作表現コース】

開講年次：１年次１期

演習

単位：４単位

■科目のねらい

この授業では、様々な演習を経て「衣」の造形の根拠の確立を行う。

ここではテーマを大きく「身体」、「情景」、「外部意識」と「色彩」とする。

「身体」では、ドローイングや身体形態の認識を通して、「情景」では写真などを通して、「色彩」では様々な色素材による実験的創作を通して、それぞれの造形の出発点をより意識的にすることにより、コンセプトの強化へ向かう。また、つくりあげた造形作品を「外部意識」に対照することにより、作品の内的衝動に止まることなく、客観的な表現力を身につける。なぜ“つくるのか”を己の中に問い、向き合い、探り、その基盤をつくりあげる研究である。

・造形表現構想法

〈A. 表現構想研究〉（瀬古）、〈B. デジタルツール研究〉（千代崎）、〈C. 展示・発表〉（瀬古、千代崎）の３本の軸による様々な演習を経て「衣の造形」創作の根拠の確立を行う。

〈A. 表現構想研究〉

ここではテーマを大きく「身体」、「情景」の二つとする。

「身体」では、主に人体形態の確認とともに、その身体的（或いは直接的）表現の日常化と展開を図り、「情景」では視覚的に、或いは意味的にイメージリサーチを行い、自分は「なぜ」造形をするのかの根本を試行しながら、造形イメージの発想力及びその構想力の探求を行う。

〈B. デジタルツール研究〉

アナログとデジタルを行き来しながら「ものづくり」を俯瞰する視野を獲得するための「環境」を準備する。

〈C. 展示・発表〉

各自の造形研究の初期段階から客観的視点を通した表現方法の実践を行い、作品表現の強化を行う。

[担当：瀬古徹、千代崎寛 15回]

・色彩表現法

「衣」の造形の出発点として「色彩」を軸とし、それを視覚的、触覚的、そして構造的にとらえ、また逆に役割を与えた色彩の再構築によつての創作研究を行う。

従来の形態(フォルム)と色彩の分化を行わず、直接「色彩」によつて形態(フォルム)の造形を行う。ある時は色材としての紙や布のような可塑性のある素材によつて、ある時は光によつて、またある時は独立した色彩の「意味」によつて直観的な創作過程を体験し、それらの過程の記録画像や映像による検証を経て、自らの運動神経にも似た造形能力の確認と強化へ向かう。

[担当：土屋純一 15回]

以上の柱となる２つの視点により、創作の研究を進行して行く。

■到達目標

創作における説明可能な根拠のあるコンセプトの確立を行う。

■修了認定・学位授与の方針と該当授業科目の関連

修了認定に必要な科目である。

本科目は創作研究Ⅱ、Ⅲ、および修了制作に向けて、ドローイングや写真表現を用いた「視野」の拡充、自意識の確認、ものづくりと発表のプロセスを主に表現媒体（印刷、映像、Webなど）を用いた創作意識の客体化（造形表現構想法）、現代の多様な美術表現や人体に目を向けた色材の実験研究を行い、従来の固定概念からの脱却とそこからの表現方法の模索（色彩表現法）等を通して、「衣の造形」作家としての制作姿勢の基盤づくりとその作品水準の向上を図り、修了制作におけるプレゼンテーション、インスタレーション、パフォーマンスといった表現への足がかりとすることを目的とする。

■担当教員

瀬古徹、千代崎寛、土屋純一

■授業計画・内容

	授 業	
	▼造形表現構想法	▼色彩表現法
第 1 回	〈A. 表現構想研究〉① 【身体】-1 導入。ドローイング、身体を使った造形プラン、検証 →美術解剖学的人体解釈の確認 (瀬)	→授業趣旨と準備 (土)
第 2 回	〈C. 展示・発表〉① 導入 (瀬・千)	「テクスチャー表現 1」 →異なる特性の材料による色彩を伴った材質表現 (土)
第 3 回	〈A. 表現構想研究〉② 【情景】-1 →写真。街に出る。“質”を集める (瀬)	「テクスチャー表現 2」 →（色材の特性、見え方） (土)
第 4 回	〈B. デジタルツール研究〉① プリントメディア演習_1 作品資料・プロフィールの制作① (千)	「テクスチャー表現 3」 →（材料の特性、見え方） (土)
第 5 回	〈C. 展示・発表〉② 確認-1 (瀬・千)	「テクスチャー表現 4」 →（色彩と質感の構成） (土)
第 6 回	〈B. デジタルツール研究〉② プリントメディア演習_2 作品資料・プロフィールの制作(2) (千)	「テクスチャー表現 4」 →（色彩と質感の構成） (土)
第 7 回	〈A. 表現構想研究〉③ 【身体】-2 ドローイング。観察、検証、展開→「直接表現」 (瀬)	「素材からの色彩造形」 →身近な素材を利用した色彩造形表現 (土)
第 8 回	〈B. デジタルツール研究〉③ Web メディア演習_1 プリントメディア演習_1、2 の Web 上への展開① (千)	「素材からの色彩造形」 →身近な素材を利用した色彩造形表現の記録 (土)
第 9 回	〈B. デジタルツール研究〉④ Web メディア演習_2 プリントメディア演習_1、2 の Web 上への展開② (千)	「身体に関係づけた立体造形 1」 →人体の色、質感、形態、構造をふまえた立体造形 (土)
第 10 回	〈C. 展示・発表〉③ 確認-2 (瀬・千)	「身体に関係づけた立体造形 2」 →（構想） (土)
第 11 回	〈A. 表現構想研究〉④ 【情景】-2 →写真。街に出る。記号を集める (瀬)	「身体に関係づけた立体造形 3」 →（材料選択） (土)
第 12 回	〈B. デジタルツール研究〉⑤ 映像メディア演習_1 (千)	「身体に関係づけた立体造形 4」 →（色材選択） (土)
第 13 回	〈B. デジタルツール研究〉⑥ 映像メディア演習_2 (千)	「身体に関係づけた立体造形 5」 →（色彩、材料の組み合わせ） (土)
第 14 回	〈C. 展示・発表〉④ 搬入・展示 (瀬・千)	「身体に関係づけた立体造形 5」 →（人体とのかかわり） (土)
第 15 回	〈C. 展示・発表〉⑤ プレゼンテーション (瀬・千)	「身体に関係づけた立体造形 5」 → 総合講評 (土)

■研究のための時間外準備

・造形表現構想法

- 第1回 受講前：表現に関係する著作権の事例をニュースや新聞などで調べておく。
受講後：自身のポートフォリオなど記録資料の再確認、修正。
- 第2回 受講前：研究計画書の確認、修正。180分
受講後：作品制作。展示のプランニング（エスキース、展示想像イラストレーション等）
（→第5回の経過報告プレゼンテーションの講評にてフィードバック）1440分
- 第3回 受講前：デジタルカメラの露出機能、絞り優先機能の確認。30分
受講後：「質感」をテーマにした写真集1冊分（プリント100枚）
（→第11回においてプレゼンテーションの講評にてフィードバック）360分
- 第4回 〔継続研究〕印刷メディアのリサーチと収集。画集や作品集、ポートフォリオなどの“記録方法”
と“著作権の表記”について他者の例を収集し分析してみる。（→第6回に向けて）
〔準備研究〕デジタルカメラによる「イメージ」の収集と編集デザインを通した紙媒体（印刷物）
の作成（→第6回に向けて）
〔フィードバック〕デジタルカメラによる「イメージ」の収集課題の講評とディスカッションによ
る確認を通して展開を図る。180分
- 第5回 受講前：作品制作。展示のプランニング（エスキース、展示想像イラストレーション等）1440分
受講後：作品制作の継続。展示のプランニング（エスキース、展示想像イラストレーション等）、
ボディーの使用、取り付け金具等の研究、プレゼンテーション草案作成
（→第10回の経過報告プレゼンテーションの講評にてフィードバック）1440分
- 第6回 〔継続研究〕印刷メディアのリサーチと収集（→第8回に向けて）
〔準備研究〕Webサイトのリサーチ。“著作権の表記”について他者の例を収集し分析してみる。
（→第9回に向けて）
〔フィードバック〕印刷メディアとしての作品とリサーチ資料の提出後の講評とディスカッション
による確認を通して展開を図る。180分
- 第7回 受講前：可塑性のある素描素材の準備、確認。30分
受講後：直接的表現による存在自己証明を目的としたドローイング作品の数点制作
（→第11回においてプレゼンテーションの講評にてフィードバック）90分
- 第8回 〔継続研究〕Webサイトのリサーチと資料作成。（→第9回に向けて）
〔準備研究〕自身のWebサイトのプランニング（→第9回に向けて）
〔フィードバック〕リサーチ資料の提出後の講評とディスカッションによる確認を通して展開を図
る。120分
- 第9回 〔継続研究〕Webサイトの制作。著作権表記などの確認（→第12回に向けて）
〔準備研究〕プレゼンテーションにおける映像表現のリサーチ
〔フィードバック〕Webサイトの作品とリサーチ資料の提出後の講評とディスカッションによる確
認を通して展開を図る。（→第12回に向けて）180分
- 第10回 受講前：作品制作の継続。展示のプランニング継続、ボディーの使用、取り付け金具等の研究、
プレゼンテーション草案作成。1440分
受講後：作品制作の継続。展示のプランニングの継続、プレゼンテーション構想継続
（→第14回のプレゼンテーションリハーサルの講評にてフィードバック）1440分
- 第11回 受講前：「記号」の意味のリサーチ。60分
受講後：「記号」をテーマにした写真集1冊分（プリント100枚）
（→第15回においてプレゼンテーションの講評にてフィードバック）360分
- 第12回 〔継続研究〕映像メディアによる制作（→第13回に向けて）
〔準備研究〕映像表現のリサーチ（→第13回に向けて）
〔フィードバック〕映像メディアによる作品とリサーチ資料の提出後の講評とディスカッションに
よる確認を通して展開を図る。180分
- 第13回 〔継続研究〕映像メディアによる制作とWebサイトの更新。クレジットと著作権表記の確認、修正。
（1年次後期「創作研究Ⅱープレゼンテーション演習ー1ー」にてフィードバック）、
映像メディアによる作品とリサーチ資料のプレゼンテーション後の講評とディスカッ
ションによる確認を通して展開を図る。180分
- 第14回 受講前：作品制作の継続。展示のプランニングの継続、準備、プレゼンテーション構想継続
（→第15回のプレゼンテーションの講評にてフィードバック）1440分
受講後：プレゼンテーションの準備、リハーサル、修正
（→第15回のプレゼンテーションの講評にてフィードバック）180分
- 第15回 受講前：プレゼンテーションの準備、リハーサル、修正。180分
受講後：後期作品制作、そして2年修了制作に向けての作品構想の「絵」、「写真」による実践の提
案、デジタルツールの実践提案
〔後期及び2年次に向けて〕1年次後期「創作研究Ⅱープレゼンテーション演習ー1、一作品制作ー」にて研究計画
書の修正、提出、講評（フィードバック）。360分

・色彩表現法

- 第1回 「色彩」や「材質感」及び「質の変化」に対する考察〔→第1回、第6回に向けての準備研究〕30分
「質の変化」のサンプル資料のまとめ〔→第2回に向けての準備研究〕60分
- 第2回 「エンボス」の為の材料リサーチ〔準備研究〕60分、
エンボス加工によるサンプル資料のまとめと展開〔→第5回に向けての準備研究〕60分
- 第3回 第2回の結果を踏まえた「エンボス」の為の材料リサーチ〔準備研究〕60分、
金属素材等によるエンボス加工によるサンプル資料のまとめ〔→第5回に向けての準備研究〕60分、
人体における「皮膚の色」のサンプリング〔→第9回に向けての準備研究〕180分
- 第4回 素材から「色」を抽出するための材料研究〔準備研究〕60分、
抽出した色のサンプル資料のまとめと展開〔→第5回に向けての準備研究〕60分
- 第5回 集積構造のリサーチ〔準備研究〕60分、
エンボスや圧縮、集積による複合素材の資料化〔→第10回に向けての準備研究〕60分
- 第6回 第5回の実験を踏まえて材料の再検討〔準備研究〕60分、
記録資料のまとめと展開〔→第10回に向けての準備研究〕60分、web教材の試聴。30分
- 第7回 資料、指定書籍を参考にした色彩造形の計画〔準備研究〕60分、
記録資料の制作120分、web教材の試聴 30分
- 第8回 計画に基づく実作品制作、記録資料のまとめ120分
- 第9回 基底材の制作〔準備研究〕60分、
課題「皮膚の質」の制作〔→第13回に向けての準備研究〕300分
- 第10回 「皮膚のイメージ」に関する資料収集〔準備研究〕120分、
「皮膚のイメージ」素材の資料化〔→第13回に向けての準備研究〕60分
- 第11回 配布資料をもとにした色材に関する調査、オリジナルな着色材の予備実験、計画〔準備研究〕120分、
制作した着色材のサンプル資料のまとめと応用〔→第12回に向けての準備研究〕60分
- 第12回 「人体の着色」に関する資料収集〔準備研究〕60分、web教材の試聴 30分、
ボディペイントの記録資料のまとめ〔→第13回に向けての準備研究〕120分
- 第13回 身体に関する「色」「質」「形」に関する資料収集〔準備研究〕60分、
素材の資料化〔→第14回に向けての準備研究〕60分、web教材の試聴 30分
- 第14回 「身体を使った表現」の資料収集〔準備研究〕60分、
記録資料のまとめと展開〔→第15回に向けての準備研究〕120分
- 第15回 記録ファイルを完成させる〔準備研究〕180分、演習内容と各自の今後の研究テーマを含めた展望
〔→創作研究Ⅱ・作品制作、修了制作に向けての準備研究〕60分

■教科書・参考文献等

参考文献

・造形表現構想法

- 中尾喜保著『新版／生体の観察』メヂカルフレンド
- 中尾喜保、宮永美知代著『美術解剖学アトラス』南山堂
- STEPHEN LONGSTREET: *the Figure in Art*. BORDEN PUBLISHING COMPANY
- ウィリアム・A・ユーイング著『THE BODY』那須孝幸、渡辺純子訳、美術出版社
- 赤瀬川原平著『正体不明』東京書籍
- 飯沢耕太郎著『深読み! 日本写真の超名作100』パイインターナショナル
- 田中浩也(編・著)『FabLife - デジタルファブ리케이션から生まれる「つくりかたの未来」』オライリージャパン
- 田中浩也(著)『Fab - パーソナルコンピュータからパーソナルファブ리케이션へ』オライリージャパン
- Fabの本制作委員会(編・著)『実践Fabプロジェクトノート・デジタルファブ리케이션のアイデア40』グラフィック社
- 藤幡正樹(編・著)『カラー・アズ・ア・コンセプトーデジタル時代の色彩論』美術出版社

・色彩表現法

- 日経デザイン編『素材とデザインの教科書』日経BP社
- Andy Goldsworthy: *A Collaboration with Nature*. Harry N. Abrams
- Andy Goldsworthy: *Time*. Harry N. Abrams
- Tara Donovan, Lawrence Weschler, Nicholas Baume, Jen Mergel: *Tara Donovan*. Monacelli Press
- Tokuji Yoshioka, Paola Antonelli, Elisa Astori, Kozo Fujimoto, Ross Lovegrove, Ingo Maurer, Issey Miyake and Ryu Niimi: *Tokuji Yoshioka Design*. PHAIDON
- Sarah E. Braddock Clarke, Marie O'Mahony: *Techno Textiles 2*. Thames & Hudson
- Anne Varichon 著 河村真紀子、木村高子訳『色-世界の染料・顔料・画材 民族と色の文化史』マール社

■成績評価基準と方法

正に自立した造形作家の根幹を成すものを探求する授業である。従って、“課題”という意識でのみの取り組みは適さない。積極的に自らの視野を広げる姿勢とそのためのリサーチ能力を評価ポイントとする。

正に自立した造形作家の根幹を成すものを探求する授業である。従って、“課題”という意識でのみの取り組みは適さない。積極的に自らの視野を広げる姿勢とそのためのリサーチ能力を評価ポイントとする。

課題とプレゼンテーションにて評価が行われる。

瀬古担当

課題・制作への取り組みの姿勢（経緯）	50%	研究テーマ、エスキース、作品のプロセスがわかるレポート等の質
授業内試験等、作品、レポート、プレゼンテーション（結果）	50%	作品による
外部専門家評価	0%	

千代崎担当

課題・制作への取り組みの姿勢（経緯）	70%	研究テーマとコンセプト、制作プロセスの記録（エスキース、ポートフォリオ）の質と量による
授業内試験等、作品、レポート、プレゼンテーション（結果）	30%	作品とプレゼンテーションによる
外部専門家評価	0%	

授業準備の内容と課題を独創性のある視点から応用展開できているか。そして最終課題の完成度と各課題のまとめ（ファイル）を基準に総合評価する。

土屋担当（土屋）

課題・制作への取り組みの姿勢（経緯）	30%	実験や考察、展開が授業外で積極的に行われているか。
授業内試験等、作品、レポート、プレゼンテーション（結果）	70%	各課題、ファイル、最終作品評価の内容。
外部専門家評価	0%	

■研究倫理への取り組み

・造形表現構想法 担当瀬古、千代崎；

初回の授業で“研究倫理”に関する講義を実施する。また複数回の授業課題を通して院生自身がどのように考え実践していくのかを検証する期間に位置付ける。

・色彩表現法 担当 土屋；

過去の事例をもとに作品制作や引用において著作権等のルールを踏まえた創作活動が行えるようなリテラシーを身につける取り組みを行う。

■学生へのメッセージ

視野を広げるために、自分の専門領域以外のジャンルに対する興味を暖めておくこと。

授業時間は飽くまでも課題確認、作品講評の時間であり、当然それ以外の自習時間のそれぞれの使用方法が問われることとなる。この自習時間（＝創作時間）の積極的な使い方を考えておくこと。

また、「造形表現構想法〈デジタルツール研究〉」は、単にデジタルに依存したスキル教育では無い。自身の内部にあるモノ・ゴトを外部へ取り出すための方法・考え方を研究することにある。何よりも“生身の身体（アナログ）”による（input）と（output）を経由することを前提とする。

「色彩表現法」では、既成の手段や概念にとらわれることなく、常に柔軟な発想で実験的な試みを積極的に行うこと。幅広い分野において素材、色彩、技法、表現に関するリサーチを行い、オリジナルな自己表現に結びつける積極性を必要とする。授業時間は飽くまでも課題確認、作品講評の時間であり、当然それ以外の自主的な時間の使用方法が問われることとなる。

科目名

創作技法研究Ⅱ

必修【創作表現コース】

開講年次：1年次2期

演習

単位：4単位

■科目のねらい

この授業は、試行錯誤をしながら「直接」の「衣」の造形を行う「創作技法研究Ⅰ」の発展である。

「創作技法研究Ⅰ」と同様に「解放」の創作を行うことを主たる目的としながら、さらにそれぞれの創作目的に対応した技術の探求を行う。引き続き、様々な角度から創作の発動を促すための技法を通し、創作実践の上に研究を展開して行く。

・モデリング制作法

ーモックアップー多種素材による立体造形演習ー

造形イメージの発想のための、立体的なドローイング或いは彫刻におけるの塑造のような可塑性を前提とした多種素材による造形演習を行う。(布によるフリースタイルのクロスワークも含む。)この創作研究は継続性を重視し、絶えず、組み立てと解体を反復しながら進行する。従って、途中経過の画像記録によるその記録化を行うことを標準とする。

造形的な「発見」と、それを自らの「感性」の鋭敏さに繋げていくダイナミックな造形力を求め、「創作技法研究Ⅰ」の継続と発展を行う。

テーマ：

- a. 各自の研究テーマを思考のベースとし、アクセサリーを制作する。アクセサリーは服飾・美術のどちらからのアプローチも可能であり、修了制作時に作品として制作する可能性も大いにある。

コンセプトの立案のプロセスはどのような造形にも共通した概念である為、大学院での研究に直接的に関連した学習である。また、基礎的な金属加工の技術を習得することによって、衣の造形に幅を持たせることが可能となる。 [担当：桐山征士 6回]

- b. “木質素材”と“木工技術”を応用した造形体験によって、身体との関係性を探る。構造的な技法を体験的に学ぶことで多様な造形表現への“手掛かり”とする。 [担当：千代崎寛 6回]

- c. 既知の布素材に新たな視点を与え、素材の変形や技法について自分なりの表現方法を考えることはこれからの「衣」を造形するために必要なことであると考え、改めて「衣」の造形における布素材の可能性の探求を行う。 [担当：安部智子 6回]

・古典技法研究

「古典に還れ」といわれる。新たに何かを生み出そうと創作をする者が、いずれ還らなければならない通過点である。ここでは創作上の技法ではなく、時代を超えて規範とされてきたものとしての「古典」の技法を扱う。これまでも衣服のデザイナーたちは古典に還り、衣服とは何かを問い直し、その上に立って新たな時代への姿勢をもって衣服を創造してきた。そのようなデザイナーの一人に1920年代に活躍したマドレーヌ・ヴィオネがいる。彼女は如何に「古典」の考え方を持ち、「古典的」な衣服をデザインしていったのか。ヴィオネの作品を徹底的に分析・解析することによって、パターン・構造・素材・縫製・色彩・装飾を理解し、自らの衣服造形の可能性を見出し、最終的に製作と制作に反映させていく。 [担当：鈴木桜子 12回(集中)]

以上の2つの視点を縦横に行き来しながら、創作の研究を進行して行く。

■到達目標

何もないところから出発し、その造形すべきものの芯をとらえ、自ら方法を模索し、素材に関しての試行錯誤を繰り返しながら、すべてを同時進行で行う創作能力を養う。

■修了認定・学位授与の方針と該当授業科目の関連

修了認定に必要な科目である。

本科目は、創作研究Ⅲ、および修了制作に向けて、創作技法研究Ⅰの経験をさらに深め、創作者として必要な創作に費やす圧倒的な「量」の蓄積、「ベースとなる思想」の明快化、造形認識の“再発見”を、人の身体や生活とごく近い位置にある金属素材(モデリング制作法a)、“木質素材”と“木工技術”(モデリング制作法b)、既知の布素材に新たな視点を与える(モデリング制作法c)、「衣」の歴史的変遷を辿り、そこに展開される現代の衣の表現の源泉としての素材や表現技法の次段階探求(古典技法研究)等を通して、「衣の造形」作家としての制作姿勢の基盤づくりとその作品水準の向上を図り、修了制作におけるプレゼンテーション、インスタレーション、パフォーマンスといった表現への足がかりとすることを目的とする。

■担当教員

桐山征士、千代崎寛、安部智子、鈴木桜子

■授業計画・内容

	授 業	
第 1 回	▼モデリング制作法 a テーマ a-① アクセサリー制作① 各自の研究テーマをアクセサリーに転換する。 (桐)	▼古典技法研究 歴史へのまなざし ー歴史とは何か、古典とは何かー →導入 (鈴)
第 2 回	▼モデリング制作法 b テーマ b-① →導入 【身体・添う】 「木質素材の技法“引く”」 (千)	I. マドレーヌ・ヴィオネの衣服デザイン観 ー近代芸術との同時代性 1 身体と素材ー →導入 (鈴)
第 3 回	▼モデリング制作法 c テーマ c-① →導入 【布素材の造形】 「やわらかい」と「かたい」 (安)	II. マドレーヌ・ヴィオネの衣服デザイン観 ー古典への造形思考ー →導入 (鈴)
第 4 回	テーマ a-② アクセサリー制作① (桐)	ヴィオネの衣服造形研究① ーパターン解析ー →展開 (鈴)
第 5 回	テーマ b-② →導入 【身体・象る】-1 「木質合板の技法“足す”」① (千)	ヴィオネの衣服造形研究② ーパターン解析×身体ー →展開 (鈴)
第 6 回	テーマ c-② →展開 【布素材の造形の展開】「やわらかい」① 素材の特性を確認する (安)	ヴィオネの衣服造形研究③ ーパターン解析×身体×素材ー →展開 (鈴)
第 7 回	テーマ a-③ アクセサリー制作③ (桐)	ヴィオネの衣服造形研究④ ーパターン×身体×素材×縫製ー →展開 (鈴)
第 8 回	テーマ b-③ →展開 【身体・象る】-2 「木質合板の技法“足す”」② (千)	III. マドレーヌ・ヴィオネの衣服デザイン観 ー近代芸術との同時代性 2 色彩と装飾ー →導入 (鈴)
第 9 回	テーマ c-③ →展開 【布素材の造形】「やわらかい」② 素材の特性を表現する (安)	ヴィオネの衣服造形研究⑤ ーパターン×身体×素材×縫製×色彩ー →展開 (鈴)
第 10 回	テーマ a-④ アクセサリー制作④ (桐)	ヴィオネの衣服造形研究⑥ ーパターン×身体×素材×縫製×色彩×装飾ー →展開 (鈴)
第 11 回	テーマ b-④ →導入 【身体・覆う】-1 「木質合板の技法“積層”」① (千)	マドレーヌ・ヴィオネ作品の 歴史的 position 付けと現代 →展開 (鈴)
第 12 回	テーマ c-④→展開 【布素材の造形 2】「かたい」① 素材の特性を確認する (安)	衣服造形の可能性 各回での分析記録をまとめた研究レポートとそ れに基づく実践 →確認 (鈴)
第 13 回	テーマ a-⑤ アクセサリー制作⑤ (桐)	
第 14 回	テーマ b-⑤ →展開 【身体・覆う】-2 「木質合板の技法“積層”」② (千)	
第 15 回	テーマ c-⑤ 【布素材の造形】「かたい」② 素材の特性を表現する (安)	
第 16 回	テーマ a-⑥ アクセサリー制作⑤ 表面処理 完成 (桐)	

第 17 回	テーマ b-⑥ →まとめと展開 【身体・すがた】(千)	
第 18 回	テーマ c-⑥→まとめ 【布素材の造形 2 の展開】 「やわらかい」と「かたい」(安)	

■研究のための時間外準備

・モデリング制作法

テーマ a

- 第 1 回 ターゲットの行動範囲まで幅を広げたリサーチ。
第 4 回のイメージボード制作でフィードバックする。〔準備研究〕120 分
- 第 4 回 イメージボード制作のための情報整理。下案制作。
第 7 回のアクセサリ制作においてフィードバックする。〔準備研究〕180 分
- 第 7 回 完成までを逆算し、必要な作業を進めておく。第 10 回の制作でフィードバック 〔継続研究〕180 分
- 第 10 回 第 13 回の表面処理に必要な準備を進める。
第 13 回の表面処理でフィードバックする 〔準備研究〕120 分
- 第 13 回 修了制作に向けての作品構想として授業内容を整理しておく 〔継続研究〕120 分

テーマ b

- 第 2 回 〔継続研究〕課題作品の制作と制作ノートによるプロセスの確認(→第 5 回プレゼンテーションに向けて)
〔準備研究〕身近に存在する木質系素材と技法のリサーチ、エビデンスに活用するための記録資料
(リファレンス・エスキースなど)を準備する。〔→第 5 回に向けて〕
〔フィードバック〕第 1 課題【身体・添う】作品のプレゼンテーション後の講評とディスカッション
による確認を通して展開を図る。180 分
- 第 5 回 〔継続研究〕課題作品の制作と制作ノートによるプロセスの確認(→第 8 回プレゼンテーションに向けて)
〔準備研究〕身体感覚の延長としての家具・用途のリサーチ (→第 8 回に向けて)
〔フィードバック〕第 2 課題【身体・象る】作品のプレゼンテーション後の講評とディスカッション
による確認を通して展開を図る。180 分
- 第 8 回 〔継続研究〕課題作品の制作と制作ノートによるプロセスの確認(→第 11 回プレゼンテーションに向けて)
〔準備研究〕接合・接着のリサーチと実験
〔フィードバック〕第 2 課題【身体・象る】作品のプレゼンテーション後の講評とディスカッション
による確認を通して展開を図る。180 分
- 第 11 回 〔継続研究〕課題作品の制作と制作ノートによるプロセスの確認(→第 14 回プレゼンテーションに向けて)
〔準備研究〕仕上げ・塗装・塗料のリサーチと実験治具準備 (→第 14 回に向けて)
〔フィードバック〕第 3 課題【身体・覆う】作品のプレゼンテーション後の講評とディスカッション
による確認を通して展開を図る。180 分
- 第 14 回 〔継続研究〕課題作品の制作と制作ノートによるプロセスの確認(→第 17 回プレゼンテーションに向けて)
〔準備研究〕仮設空間への設置とプレゼンテーション準備、著作権表記などの確認 (→第 17 回に向けて)
〔フィードバック〕第 3 課題【身体・覆う】作品のプレゼンテーション後の講評とディスカッション
による確認を通して展開を図る。180 分

テーマ c

- 第 3 回 〔準備研究〕布素材において「やわらかい」「かたい」とはどのようなものであるかを考察し、事例
およびその際に使用されている素材や技法について研究し、収集資料を作り、プレゼン
テーションの準備を行う。また、各自が「やわらかい」「かたい」と考える布素材の実物
サンプル(10cm×10cm 以上)を各々 3 種類以上準備する事。60 分
〔継続研究〕ディスカッションの結果を踏まえて「やわらかい」布素材について検討し試作を重ね、
そのプロセスを文章・画像として記録しながら各自の考えを整理する。120 分
- 第 6 回 〔準備研究〕「やわらかい」布素材について試作・考察を行い、各自の考えをまとめる。
使用素材の検討とディスカッションの準備。
〔継続研究〕ディスカッションの結果を踏まえて素材と表現方法を決定し課題作品の制作。
制作過程の記録。120 分
- 第 9 回 〔準備研究〕「やわらかい」布素材の作品制作を進め、そのプロセスを記録する。120 分
〔継続研究〕ディスカッションの結果を踏まえ、作品を完成させる。120 分
- 第 12 回 〔準備研究〕「かたい」布素材について試作・考察を行い、各自の考えをまとめる。
使用素材の検討とディスカッションの準備。
〔継続研究〕ディスカッションの結果を踏まえて素材と表現方法を決定し課題作品の制作。
制作過程の記録。120 分
- 第 15 回 〔準備研究〕「かたい」布素材の作品制作を進め、そのプロセスを記録する。120 分
〔継続研究〕ディスカッションの結果を踏まえ、作品を完成させる。120 分

第 18 回 〔準備研究〕「やわらかい」と「かたい」布素材を衣の造形作品として完成させ、制作過程を含め文章・画像として資料化し、プレゼンテーションに向けて準備する。
〔継続研究〕自分の作品と講評内容に対して振り返りを行う。30 分

・古典技法研究

- 第 1～3 回 文献資料の熟読 各 90 分
- 第 4～7 回 各回授業内容に応じたリサーチと製作・記録 各 120 分
- 第 8 回 文献資料の熟読 90 分
- 第 9～10 回 授業内容に応じたリサーチと製作・記録 各 120 分
- 第 11 回 授業内容に応じて現代の状況をリサーチ 90 分
- 第 12 回 研究報告と成果のまとめ 270 分

■教科書・参考文献等

- ・モデリング制作法
テーマ a
500 Pendants & Locket: Contemporary Interpretations of Classic Adornments (500 Series)
500 Earrings: New Directions in Contemporary Jewelry (500 (Lark Paperback))
500 Necklaces: Contemporary Interpretations of a Timeless Form (500 (Lark Paperback))
1000 Rings: Inspiring Adornments for the Hand (Lark Jewelry Books)
テーマ b
鳥海義之助著『図解木工の継手と仕口』 理工学社
Gary Rogowski: *The Complete Illustrated Guide to Joinery*. Taunton
濱島 正士編『継手・仕口—日本建築の隠された知恵』INAX 出版
テーマ c
Roberto Capucci : *Roberto Capucci Creativita al di la del tempo*. Istituto nozionale per il Commercio Estero
Collet Wolff Krause: *The Art of Manipulating Fabric*. Publications Iola U.S.A 1996
Sharon Sobel :*Draping Period Costumes*. Focul Press
- ・古典技法研究
E. H. カー『歴史とは何か』岩波新書 1962
ベティ・カーク『ヴィオネ』球龍堂 1998
Harold Koda, *Goddess: The Classical Mode*, Metropolitan Museum of Art, 2003.
マーク・ウィグリー『白い壁、デザイナードレス 近代建築のファッション化』鹿島出版会 2021
Richard Martin, *Cubism and Fashion*, The Metropokitan Museum of Art, 1998
Three Women: Madeleine Vionnet, Claire McCardell, and Rei Kawakubo, Fashion Institute of Technology, 1987

■成績評価基準と方法

技法研究という名称の授業ではあるが、ただ既存の衣服制作技法の“なぞり”は評価しない。体験する様々な技法は、飽くまでも創作そのものの出発点であり、既存の創作概念を打ち破るものでなくてはならない。従って、そのための解放に向かう創作姿勢に評価の重きを置くこととなる。

制作への積極的な取り組み。課題への取り組み姿勢を「制作ノート」によって評価。プレゼンテーションによって作品の評価とする。

【モデリング制作法】

・テーマ a

各自の研究テーマに対する独自の視点とその体现。美術作家である教員とのディスカッションを通して、思考の密度をどこまで掘り下げられるかがポイント。技術力ではなく、完成度を上げようとする姿勢を基準とする。

課題・制作への取り組みの姿勢(経緯)	50%	独自の視点と思考の密度の高さ
授業内試験等、作品、レポート、プレゼンテーション(結果)	50%	作品の完成度(技術力ではない)
外部専門家評価	0%	

・テーマ b

“木質素材”と“木工技術”をとおした制作への姿勢と研究のプロセスを記録した「制作ノート」によって評価する。作品の評価は特にプレゼンテーションに重きを置く。

課題・制作への取り組みの姿勢(経緯)	60%	エスキースと制作プロセスを記録した「制作ノート」の質と量による
授業内試験等、作品、レポート、プレゼンテーション(結果)	40%	作品とプレゼンテーションによる
外部専門家評価	0%	

・テーマc

「やわらかい」・「かたい」布素材でできる表現の可能性に対し、どれだけアプローチできるか。プレゼンテーションやディスカッションなどを通して他者に伝えることが評価において重要である。そのためには各自の研究や他者とのディスカッションを通して、自分の考えを明確に言語化し、作品をブラッシュアップしていくことが必要である。作品は制作プロセスと共に資料(含む作品写真)としてまとめ提出する。提出資料は評価コメントを付けて授業後に返却する。

課題・制作への取り組みの姿勢(経緯)	40%	制作プロセスを記録した資料の質によって評価する
授業内試験等、作品、レポート、プレゼンテーション(結果)	60%	作品とプレゼンテーションによって評価する
外部専門家評価	0%	

【古典技法研究】

ヴィオネの作品に対する深い観察眼と解析を文章・図解で詳細にまとめた記録・研究レポートを作成していく。それを基に、毎回ディスカッションとフィードバックを行ない、最終的に衣服造形の可能性をどれだけ導き出せるかを評価していく。

課題・制作への取り組みの姿勢(経緯)	50%	1つの作品を深く追及していこうとする研究姿勢
授業内試験等、作品、レポート、プレゼンテーション(結果)	50%	記録・研究レポートとそれに基づく実践
外部専門家評価	0%	

■研究倫理への取り組み

・モデリング制作法 担当 桐山；

自らの研究発表(彫刻家としての展示会等)を通して、模倣とオマージュの違いを明確にし、法的な著作権「意匠権」にとどまらず、倫理的な著作権に関して考察していきたい。

模倣(真似る・流行を追う・学習や練習を目的とする)とオマージュ(尊敬や賞賛の気持ちを込めて発展させる・既存の作品や表現を参考にしながらも、新たな創造性を加える)は、どちらも創作活動において重要な要素だが、意図や目的を明確にすることで、より効果的に活用する。

・モデリング制作法 担当 千代崎；

作品資料を活用していく中での著作物(他者と自己)の扱いについて、主に表記方法から考察し実践していく。

・モデリング制作法 担当 安部；

院生が資料として収集する「他者の作品の意匠権」について、院生とのディスカッションを含め研究倫理としての理解を深めていきたい。

・古典技法研究 担当 鈴木；

オリジナルとコピーの問題について歴史的背景を理解した上で、これまで発表されてきたヴィオネ作品とそれに関連するドレス作品を事例に考察し、自らの創作研究への姿勢に繋げていく。

■学生へのメッセージ

授業時間は飽くまでも、課題確認、作品講評の時間であり、当然それ以外の自習時間のそれぞれの使用方法が問われることとなる。この自主研究時間(＝創作時間)の積極的な使い方を考えておくように。

科目名 創作研究Ⅱ

必修【創作表現コース】

開講年次：1年次2期

演習

単位：4単位

■科目のねらい

この授業では「創作研究Ⅰ」の様々な演習を基盤とし、それぞれのテーマ立ての上、「衣」の造形の作品制作を行う。

また、「創作技法研究Ⅰ、Ⅱ」の流れを受け、創作の意識を実験的「解放」から、それぞれのテーマによる形態の創出へと徐々に展開して行く。まとめとしての作品そのものの制作のみならず、コンセプトワーク、ビジュアルイメージ、マテリアルイメージなど作品を成立させる様々な要素を着実に意識化することを重要視する。

そして、プレゼンテーションの可能性の探求を通し、作品を表現の領域まで高めて行く。

前期から引き続き、つくりあげた造形作品を「外部意識」に対照することにより、作品の内的衝動に止まることなく、客観的な表現力を身につけることに向かう応用課題を行う。

・作品制作

ーテーマ、コンセプトワーク、マテリアルワーク、ビジュアルイメージ展開ー

与えられたテーマ上での、創作の骨格となるコンセプトの確立とそこからの「衣」の創作への展開を狙う。

ここでも「なぜ」「衣」の造形を行うのかの根本を試行しながら、発想、構想、モックアップなどによる形態(フォルム)の試行錯誤、素材研究など造形作家としての様々な創作過程や要素を統合した創作研究を行う。

後半には創作研究Ⅲに向けてのグループ分けを行う。

[担当：桐山征士、千代崎寛、安部智子、瀬古徹 14回]

・プレゼンテーション演習 - 1

ープレゼンテーションプランニング、インスタレーションー

作品のプレゼンテーションの方法とその技術の研究を行う。具体的には、写真、映像作品によるイメージ化、空間模型、設置、ライティングの可能性の上で探求して行く。

[担当：瀬古徹、千代崎寛 14回]

・応用課題

ープレゼンテーションー

公的な審査、或いは審美眼に自らの作品を照らし合わせ、個人の「主観性」と社会の「客観性」の対比のもとに、造形作家としての創作意識と作品そのものの強化を行う。

[担当：瀬古徹 2回]

以上の3つの実践的方法論により、創作の研究を進行して行く。

■到達目標

創作を意識的に「作品化」、そして「表現」へと向かわせ、「衣」の造形作家としての礎を成す。

■修了認定・学位授与の方針と該当授業科目の関連

修了認定に必要な科目である。

本科目は創作研究Ⅲ、および修了制作に向けて、それぞれの造形研究テーマに基づき、エスキース及びマケット等から作品を構想し、自らの制作プロセスの試行錯誤を行いながら創作研究を行い（作品制作）、作品を表現するために必要な様々な角度を持った切り口を「どのように伝えるか」ということをアナログとデジタルの双方から実験・研究・考察し（プレゼンテーション演習 - 1）、その二つの研究を統合し、外部の専門的な視点からの批評、評価を受け（応用課題）、「衣の造形」作家としての制作姿勢の基盤づくりとその作品水準の向上を図り、修了制作におけるプレゼンテーション、インスタレーション、パフォーマンスといった表現への足がかりとすることを目的とする。

■担当教員

瀬古徹、千代崎寛、桐山征士、安部智子

■授業計画・内容

	授 業		
	▼作品制作	▼プレゼンテーション演習 - 1	▼応用課題
第1回	→導入 「創作技法研究Ⅱ」で提出の研究テーマの確認	【インスタレーションの可能性1】 →導入 (瀬、千)	
第2回	→コンセプトワーク・マテリアルワーク。 企画書とマケット①	【インスタレーションの可能性2】 →現代美術作品の考察 (瀬)	

第3回	→コンセプトワーク・マテリアルワーク。 企画書とマケット②	【インスタレーションの可能性3】 →ニュートラルスペース、ライティング 研究。置く、掛ける、吊るす、目の高さ、 視点の研究、撮影 (瀬)	
第4回	→制作1	“雰囲気”を考える →画像、映像記録 (瀬)	
第5回	→制作2	【編集の可能性-1】 デジタルツール・メディアによる表現 ①「画像」 (千)	
第6回	→制作3	【プレゼンテーション-1】 →ツールを使う① (千)	
第7回	→途中講評1 ビジュアル化へのなげかけ	【インスタレーションの可能-4】 →ニュートラルスペース、ライティングの 研究。置く、掛ける、吊るす、目の高さ、 視点の研究、撮影(2) (瀬)	
第8回		【プレゼンテーション-2】 →ツールを使う② (千)	
第9回	→制作4	【編集の可能性-2】 →デジタルツール・メディアによる表現② 「作品資料」 (千)	
第10回	→制作5	【編集の可能性-3】 →デジタルツール・メディアによる表現③ 「作品資料」 (千)	
第11回	→途中講評2 確認、検証	【編集の可能性-4】 →デジタルツール・メディアによる表現 ④「Web 上への展開」 (千)	
第12回	→制作6 完成へ向けて	【プレゼンテーション-3】 →身体を使い、「伝える」 (瀬、千)	
第13回	→制作7 再度コンセプトの確認	【編集の可能性-5】 →デジタルツール・メディアによる表現⑤ 「Web 上への展開」 (千)	
第14回	→制作8 ビジュアルイメージの作成	→まとめ。 プレゼンテーションの可能性について 作品集編集に向けて (瀬、千)	→〈創作技法研究Ⅰ〉の 作品のプレゼンテーショ ン、外部審査員を含めた 審査、講評①
第15回	→講評、まとめ		→〈創作技法研究Ⅰ〉の 作品のプレゼンテーショ ン、外部審査員を含めた 審査、講評②

■研究のための時間外準備

・作品制作

- 第1回 各自研究テーマのポートフォリオによる確認〔準備研究〕90分
当日ディスカッションによるフィードバック
- 第2回 作品のコンセプト案（エスキース、マケット等）作成〔準備研究〕240分
当日ディスカッションによるフィードバック
- 第3回 作品のコンセプト案（エスキース、マケット）の改善〔準備研究〕240分
当日ディスカッションによるフィードバック
- 第4回 作品「発想」の具体化〔→第7回においてプレゼンテーションの講評にてフィードバック〕、
素材等の準備〔準備研究〕240分。当日ディスカッションによるフィードバック
- 第5回 発想を構想化した制作プロセスの確認〔準備研究〕240分
当日ディスカッションによるフィードバック
- 第6回 作品「構想」に主軸を置いた制作
〔→第7回においてプレゼンテーションの講評にてフィードバック〕〔準備研究〕360分
- 第7回 作品構想のプレゼンテーション準備〔準備研究〕120分。当日講評にてフィードバック、
作品構想の評価の分析、問題点の解決
〔→第8回以降においてディスカッションにてフィードバック〕240分
- 第9回 表現としての造形に重きを置いた制作〔準備研究〕360分
当日ディスカッションによるフィードバック

- 第10回 素材による技法を意識した制作〔準備研究〕360分。当日ディスカッションによるフィードバック
- 第11回 途中講評における評価の分析と、問題点の解決。それぞれの制作プロセスの確認と制作実践
〔→第15回、及び「応用課題」においてプレゼンテーションの講評にてフィードバック〕〔継続研究〕480分
- 第12回 制作プロセスの確認、展開
〔→第15回、及び「応用課題」においてプレゼンテーションの講評にてフィードバック〕〔継続研究〕480分
- 第13回 制作プロセスの確認
〔→第15回、及び「応用課題」においてプレゼンテーションの講評にてフィードバック〕〔継続研究〕480分
- 第14回 作品構想のプレゼンテーション準備〔準備研究〕、作品構想の評価の分析、問題点の顕在化と解決
〔→第15回、及び「応用課題」においてプレゼンテーションの講評にてフィードバック〕〔継続研究〕480分
- 第15回 1) 作品表現の方向性の確認 2) 1)に伴う制作プロセスの確認 3) 作品展示方法の研究と確認
〔→「応用課題」及び、2年次「創作研究Ⅱ—作品制作—」にてフィードバック〕〔継続研究〕480分

・プレゼンテーション演習 - 1

- 第1回 受講前；現在制作進行中の自分の作品の資料の準備。90分
受講後；自分の作品の展示イメージのスケッチ
〔→第2回においてプレゼンテーションの講評にてフィードバック〕90分
- 第2回 受講前；現代美術作品の展示イメージ（画像）のリサーチ。60分
受講後；受講前リサーチを参考にした自分の作品の展示イメージのスケッチ
〔→第3回においてプレゼンテーションの講評にてフィードバック〕90分
- 第3回 受講前；ニュートラルスペースでの展示（例えば、美術展）の画像リサーチ。60分
受講後；ニュートラルスペースにおける「もの」（レディメイド）の撮影実験
〔→第4回においてプレゼンテーションの講評にてフィードバック〕90分
- 第4回 受講前；所有するカメラの機能の確認。30分
受講後；カメラのエフェクト機能の応用による「もの」の撮影実験・画像による「断片の集積」とその
編集に向けて画像選定〔→第5回においてプレゼンテーションの講評にてフィードバック〕120分
- 第5回 〔継続研究〕 自身の作品の記録（画像とテキストによる）と資料制作のためのノートによるプロセスの確認（→第9回に向けて）、
〔準備研究〕 作品資料制作に向けて作品集、写真集などのリサーチ（→第9回に向けて）
〔フィードバック〕 資料制作のためのノート提出後の講評とディスカッションによる確認を通して展開を図る。600分
- 第6回 受講前；プレゼンテーションのためのシナリオ、ビジュアルボード作り。90分
受講後；ビジュアル表現を軸としたプレゼンテーションのバージョンアップ
〔→第8回においてプレゼンテーションの講評にてフィードバック〕60分
- 第7回 受講前；所有するカメラの機能の更なる確認。30分
受講後；ニュートラルスペースにおける「作品」（自分の）の撮影実験
〔→第9回においてプレゼンテーションの講評にてフィードバック〕90分
- 第8回 受講前；プレゼンテーションのためのシナリオ、ビジュアルボード作り、自分の作品発表に適したツールの選択、操作練習。90分
受講後；発音等の身体表現とツールの操作を軸としたプレゼンテーションのバージョンアップ
〔→第14回においてプレゼンテーションの講評にてフィードバック〕60分
- 第9回 〔継続研究〕 自身の作品の記録（画像とテキストによる）と資料制作のためのノートによるプロセスの確認（→第10回に向けて）、
〔準備研究〕 作品資料のためのエスキース、印刷物：作品集、写真集などのリサーチ（→第10回に向けて）
〔フィードバック〕 資料制作のためのノート提出後の講評とディスカッションによる確認を通して展開を図る。180分
- 第10回 〔継続研究〕 自身の作品の記録（画像とテキストによる）と資料制作のためのノートによるプロセスの確認（→第11回に向けて）、
〔準備研究〕 造形作家などのWebサイトのリサーチ（→第11回に向けて）
〔フィードバック〕 資料制作のためのノート提出後の講評とディスカッションによる確認を通して展開を図る。180分
- 第11回 〔継続研究〕 自身の作品の記録（画像とテキストによる）と資料制作のためのノートによるプロセスの確認（→第13回に向けて）、
〔準備研究〕 制作課題（作品資料とWebサイト）のプレゼンテーションに向けての準備（→第12回に向けて）
〔フィードバック〕 資料制作のためのノート提出後の講評とディスカッションによる確認を通して展開を図る。300分
- 第12回 プレゼンテーションのためのシナリオ作り、発声の練習、自分の作品発表に適したツールの選択、操作練習〔準備研究〕、発音等の身体表現とツールの操作を軸としたプレゼンテーションのバージョンアップ〔他の授業に於けるプレゼンテーションに向けて〕

- 第13回 〔継続研究〕 自身の作品の記録（画像とテキストによる）と資料制作のためのノートによるプロセスの確認（→第14回に向けて）、
 〔準備研究〕 Webサイトの記録と検証〔フィードバック〕資料制作のためのノート提出後の講評とディスカッションによる確認を通して展開を図る。120分
- 第14回 受講前；自分の作品の記録データのまとめ。90分
 受講後；修了作品発表のためのリサーチ（①ギャラリー ②小作品集）
 〔2年次に向けて、「創作研究Ⅲ―プレゼンテーション―2―」にてのプレゼンテーションの講評にてフィードバック〕180分

・応用課題

- 1) 「作品制作」において制作した作品の完成〔準備研究〕600分
- 2) 「作品制作」において制作した作品のプレゼンテーションの準備〔準備研究〕240分
- 3) 外部審査員（造形作家）に関してのリサーチ〔準備研究〕90分
- 4) 作品評価の分析、問題点の解決〔→2年次「創作研究Ⅱ―作品制作―」にてフィードバック〕240分

■教科書・参考文献等

参考文献

・作品制作

『身体 of the 夢 ファッション or 見えないコルセット』京都国立近代美術館他編集、京都服飾文化研究財団発行
 『MAISON MARTIN MARGIELA STREET special edition volumes1&2』青木正一発行、ストリート編集室、メゾンマルタンマルジェラ

Luc Derycke and Sandra Van Veire: *BELGIAN FASHION DESIGN*, LUDION

Hussein Chalayan, Caroline Evans, Suzy Menkes: *HUSSEIN CHALAYAN*, Nai Uitgevers Pub

・プレゼンテーション演習 - 1

Stefan Horn, Rudolf Netzelmann, Peter Winkkels: *Signs of the city - metropolis speaking-*. jovis

Bronwyn Cosgrave 編『SAMPLE ―100 ファッションデザイナー - 010キュレーター』ファイドン

Vivian Van Saaze: *Installation Art and Museum: Presentation and Conservation of Changing Artworks*. Amsterdam Univ Pr

■成績評価基準と方法

正に自立した造形作家であるという自意識を確立するための授業である。従って、“課題”という意識でのみの取り組みは適さない。積極的に自らの創作力と表現力を広げる姿勢を評価ポイントとする。

・作品制作

課題・制作への取組の姿勢（経緯）	60%	エスキースの物量、取り組みの量と質
授業内試験等、作品、レポート、プレゼンテーション（結果）	40%	途中講評会における作品、プレゼンテーション
外部専門家評価	0%	

・プレゼンテーション演習 - 1

瀬古担当

課題・制作への取り組みの姿勢（経緯）	50%	研究テーマによるコンセプト、制作のプロセス、エスキース、それらがわかるレポート
授業内試験等、作品、レポート、プレゼンテーション（結果）	50%	作品とプレゼンテーションによる
外部専門家評価	0%	

千代崎担当

課題・制作への取り組みの姿勢（経緯）	70%	研究テーマとコンセプト、制作プロセスの記録（エスキース、ポートフォリオ）の質と量による
授業内試験等、作品、レポート、プレゼンテーション（結果）	30%	作品とプレゼンテーションによる
外部専門家評価	0%	

・応用課題

課題・制作への取組の姿勢（経緯）	15%	「作品制作」における取組の姿勢。制作の経緯。
授業内試験等、作品、レポート、プレゼンテーション（結果）	15%	作品、プレゼンテーション
外部専門家評価	70%	専門家の視点でのプレゼンテーション、作品それぞれの社会における質との比較による

■研究倫理への取り組み

- ・作品制作、プレゼンテーション演習 - 1、応用課題 担当 瀬古；

「作品制作」においては、特にコンセプトの強化を担っているエスキースの実践と、そのプロセスのポートフォリオとしての保存の推奨を行い続けたい。これが創作者の権利の保障の一端となることを信じて、「ディフェンス」としての研究倫理と位置付けたいと思っている。

「プレゼンテーション演習 - 1」においては、共同担当の千代崎教授との共通認識の範囲から、主に著作権、著作権物への配慮を中心に取り組みを進めて行きたい。

「応用課題」においては、プロフェッショナルのクリエイター、デザイナー、アーティストに直接授業を行なってもらうものであるので当然、本人の肖像権、制作された作品(製品)の著作権(版權)、それらを出版物等に掲載したのに対する二次的著作権等に対する様々な配慮が必要となって来る。勿論、授業担当者の許可なくしてスマートフォンやタブレット等での撮影は禁止であり、観光旅行の記念撮影の様な意識での受講は絶対に許されるものではない。一期一会の緊張感の中での受講があつてこそ何歩か先に行く先輩クリエイター達から得るものがあるのではないだろうか。

これは、院生を含めての研究倫理の社会実践であると思っている。

- ・作品制作、プレゼンテーション演習 - 1 担当 千代崎；

前期「創作研究Ⅰ」造形表現構想法にて投げかけた“研究倫理”に関して、院生自身がどのように考え実践していくのかを検証する期間に位置付ける。作品集などの著作権表記を通して自身の“考え方”を育てていく。

- ・作品制作 担当 桐山；

自らの研究発表(彫刻家としての展示会等)を通して、模倣とオマージュの違いを明確にし、法的な著作権「意匠権」にとどまらず、倫理的な著作権に関して考察していきたい。

模倣(真似る・流行を追う・学習や練習を目的とする)とオマージュ(尊敬や賞賛の気持ちを込めて発展させる・既存の作品や表現を参考にしながらも、新たな創造性を加える)は、どちらも創作活動において重要な要素だが、意図や目的を明確にすることで、より効果的に活用する。

- ・作品制作 担当 安部；

院生が資料として収集する「他者の作品の意匠権」について、院生とのディスカッションを含め研究倫理としての理解を深めていきたい。

■学生へのメッセージ

視野を広げるために、自分の専門領域以外のジャンルに対する興味を暖めておくこと。

授業時間は飽くまでも、課題確認、作品講評の時間であり、当然それ以外の自習時間のそれぞれの使用方法が問われることとなる。この自習時間(＝創作時間)の積極的な使い方を考えておくこと。

何よりもまず、自身の“視野”を拡げるため、日常の在り方を問い直すこと。例えば、カメラは単に記録するためだけに在るのではなく、レンズを通して、あらためて世界を“見る”ことを可能にする。しかし、それらは自らの欲求によってはじめて“視えた”ことになる。

自らが「造形作家」であるという意志のもとで研究展開を行うこと。

科目名 メディアと造形表現

自 由【両コース共通】

開講年次：1 年次 1 期

講 義

単位：2 単位

■科目のねらい

ファッションの造形表現を「ファッションとアートの接点」という観点から追い、その歴史の流れと現在の状況、さらには、メディアの中におけるファッションの造形表現の展開を分析。なぜ、ファッションには、造形表現が必要なのか？ ファッションとアートの関係は？ メディアを通して伝わる影響とは？ エシカル・ファッション、クラフツマンシップ、デジタルも含めて、ファッションの進化に欠かせない「造形表現」について考察を重ねる。

■到達目標

ファッションの造形表現がいかにファッションの進化に影響をもたらしたか？ 新たな造形表現こそが、ファッションを進化させる原動力であるという視点を歴史、現状、メディア効果を通して明らかにしていく。ファッションとアートの関係性、及びファッションの歴史的な流れ、メディアの役割を理解できるようになる。

■修了認定・学位授与の方針と該当授業科目の関連

修了認定要件科目ではないが、造形研究の視野をより広げるために必要な科目と位置づけている。

■担当教員

田居克人、生駒芳子

■授業計画・内容

- 第1回 「ファッションとアート」 ファッションとは？アートとは？
我々の生活にとってファッションはどんな意味を持っているのか、アートはどんな意味を持っているのか。ファッションはアートなのか。ファッションとアートの関係性を探る。 [田居]
- 第2回 「ファッションとアート」 20 世紀そして 21 世紀は
20 世紀はファッションとアートとの境界線があいまいになった時代だ。20 世紀のファッションを、アートからの影響やアートとの関係性を考えながら考察し、デジタルの世界が革命をおこしつつある現在、21 世紀のファッションとアートを考える。 [田居]
- 第3回 「ファッションとアート」 ファッション・デザイナーの流れ
ヴィオネから現在にいたるまで、時代を代表したデザイナーたちを年代順に紹介し、現代のデザイナーまでの流れをたどる。またその歴史のなかでのデザイナーとアートの関係を紹介、またその社会的背景を考える。 [田居]
- 第4回 「ファッションとアート」 ファッション・メディアの役割
ファッションは、映画や写真、舞踊や漫画、アニメなどとともに 20 世紀を特徴づける芸術文化の 1ジャンルとなった。そのために大きな貢献をしたのは雑誌というメディア。21 世紀のファッションとアートにおけるメディアの役割を考える。 [田居]
- 第5回 「ファッションとアート」 コレクションとは？その意味は？
ファッションデザイナーの造形表現の発表の場であるコレクションの存在意義は？ 20 世紀から 21 世紀になり、コレクションの発表形態が大きく変わりつつある。フィジカルもありデジタルでの表現もある現在のコレクションのあり方と、これからを考える。また都市によるコレクションの違いを考える。 [田居]
- 第6回 「ファッションとアート」 大量消費社会におけるファッションとアート
一部の特権階級のものだったファッションが 20 世紀から 21 世紀になり大きくその構造が変わった。またアートも、とくに現代アートの市場は活況を呈している。それによりファッションはどう変質したか、またファッションの持っていた意味性はどうなったのか。現代アートとファッションとの関係を探る。 [田居]
- 第7回 「ファッションとアート」
デジタルが主流となった現代において、これからファッションはどうなっていくのか、ファッションビジネスの近未来を考え、またアートの新しい動きを探る。 [田居]
- 第8回 第一部「ファッションとアート」 21 世紀の状況
21 世紀に入り、ファッションとアートは急速に接近を強めた。アート・プロジェクト、美術館構想、アート・コラボレーション・アイテムなど、最新状況を探る。
第二部「縄文・弥生時代のファッション」日本のファッション史を古代から辿る、その第一弾 [生駒]
- 第9回 第一部「ファッションとアート」歴史編 VOL.1 「19 世紀末のジャポニズムと、20 世紀初頭のムーブメント」
19 世紀後半、日本の美術が欧米に与えたジャポニズムのムーブメントに始まって、ソニア・ドローネー、ジャン・コクトー、マン・レイ、パウハウスなど、ファッションとアートの境界線上での表現を開拓した永遠に古びないアーティストたちの表現を追う。
第二部「奈良時代・平安時代」のファッション＝十二単について [生駒]

- 第 10 回 第一部「ファッションとアート」歴史編 VOL.2「イヴ・サンローラン」
ファッションにアートを取り込んだ開拓者の一人、イヴ・サンローランの偉業を追う。
モンドリアン、ゴッホ、ブラック、レジェ、ドラクロワ、ベラスケス……。多くの画家にインスピレーションを受けた作品を発表しつつも「モードはアートではない」と語った。
第二部「中世、侍の妻たち」北条政子や淀君など、侍の妻たちのファッションとは？ [生駒]
- 第 11 回 第一部「ファッションとアート」歴史編 VOL.3「草間彌生」
アートの世界で、もっとも如実にファッションとのコラボレーションに挑んだ草間彌生の足跡を追いつつ、現在の展開を追跡。草間流「からだの美しい部分を見せる」ファッションとは？
第二部「江戸時代の女たち」吉原の女たち、大奥の女たちに見るファッションとは？ [生駒]
- 第 12 回 第一部「ファッションとアート」歴史編 VOL.4「三宅一生」「コムデギャルソン」「ヨウジヤマモト」70,80年代から現在に至るまで日本人デザイナーは一貫して、ファッションの造形表現の先端に立ち続けてきた。クリエイションのアート性、ファッションの展覧会の開拓について。
第二部「明治時代のファッション」川上貞奴に代表される東西ミックスのファッション。 [生駒]
- 第 13 回 第一部「ファッションとアート」歴史編 VOL.5「ミウッチャ・プラダ」「トム・フォード」「エディ・スリマン」「マーク・ジェイコブス」から「アレッサンドロ・ミケーレ」まで、90年代から21世紀にかけて、次々出現したトップ・クリエイターたちは、揃ってアートへの強い興味を掲げ、コラボレーションを展開。いかにして彼らは時代を築き、何を得たのか？
第二部「モダン・エイジ」大正ロマンから昭和初期へ、岡本かな子、白洲正子など。 [生駒]
- 第 14 回 第一部「エシカル・ファッションについて」
21世紀のファッションの鍵である、エシカル・ファッションについて考察する。
第二部「戦後ファッション」川久保玲、sacai など、前衛に生きるファッション。 [生駒]
- 第 15 回 第一部「ものづくりの原点〜クラフツマンシップと21世紀の新ジャポニスムについて」
伝統工芸やハンドメイドなど、クラフツマンシップの存在意義について考察する。その上で、21世紀の新ジャポニスムの動きを探る。
第二部「現代から未来へ」アバターから人工知能のファッションへ。 [生駒]

■研究のための時間外準備

(田居担当)

時間外準備は

20世紀のファッションの歴史について調べる

海外有名ファッション誌の歴史や、編集者について調べる

ファッション・デザイナーの哲学やクリエイションについて書かれた書籍を読む

現代アートの流れについて書かれた本を読む

準備に必要な時間は1日2時間読書で1週間ほど

文献検索及び購読 120分×7

書籍については書店で本を探す、見つけるという癖をつけてほしい。

若い人は本を読まなくなっているという現状を踏まえ、自分で書店へ行き、テーマにあった本を探すという習慣を持ってほしい。

第1回 ①美術史において肉体表現に優れた歴代のアーティストを調べる。

②肉体表現に優れた作品について調べる。

第2回 ①ファッション・デザイナーの誕生から現在まで、その流れを調べる。

②流れの後ろにある時代背景を調べる。

第3回 ①ファッションが時代と密接な関係をどのように構築してきたか調べ、また考える。

②なぜプレタポルテが隆盛になり、今またオートクチュールが注目されるのかを考える。

第4回 ①現代社会におけるコピー商品の意味及びオリジナルの重要性を考える。

②ファッションとアートの近似点、及び違いを調べる。

第5回 ①都市とファッションの関連性を考える。

②各大都市のファッションの違いを調べる。

第6回 ①メディアはファッションに対してどのように関わってきたか調べる。

②ファッション雑誌の歴史を調べ、存在理由を考える。

第7回 ①雑誌はこれから生き残れるのかを考える。

②デジタルメディアと紙メディア、強さと弱さを考える。

(生駒担当)

第8回 ①20世紀初頭のファッションにおいて、重要と思われるデザイナー、表現者について調べる。

(60分)

②縄文・弥生時代のファッションについて調べる。(60分)

第9回 ①19世紀後半のジャポニスムについてと、20世紀初頭のアートにおいて、重要と思われるアーティストについて、その歴史を調べる。(60分)

②奈良時代・平安時代のファッションについて調べる。(60分)

- 第10回 ①イヴ・サンローランの存在について、主にアートとの関連について、調査・研究。(60分)
 ②中世の日本女性のファッションについて調べる。(60分)
- 第11回 ①草間彌生の世界とコラボレーションするプランを作成・提案。(60分)
 ②江戸時代の女性(吉原、大奥)のファッションを調べる。(60分)
- 第12回 ①三宅一生、コムデギャルソン、ヨウジヤマモトについて造形性についての分析レポート作成。(60分)
 ②明治時代の女性のファッションについて調べる。(60分)
- 第13回 ①GUCCI, PRADA, LOUIS VUITTON, HERMES の変遷について調査・研究。(60分)
 ②大正ロマンから昭和初期にかけての日本女性のファッションについて調べる。(60分)
- 第14回 ①「エシカル・ファッション」について、今後の可能性を調査・提案。(60分)
 ②戦後ファッションー川久保玲や sacai など、前衛の流れについて調べる。(60分)
- 第15回 ①「クラフツマンシップ」がファッションに与える影響についてと、21世紀のジャポニズムの動きについて調査・研究。(60分)
 ②現代から未来へーファッション×デジタルで、ファッションの未来を占う。(60分)

■教科書・参考文献等

「モードの迷宮」(鷺田清一著、筑摩書房刊)
 「衣服は肉体に何を与えたか」(北山晴一著、朝日選書)
 「日本、その心とカタチ」(加藤周一著、ジブリ library)
 「名画に見るモード」
 「ブリーツプリーズ」(編集ディレクション北村みどり、タッシェン刊)
 「モードの体型」(ロラン・バルト著、佐藤信夫訳、みすず書房)
 「川久保玲とコムデギャルソン」(ディヤン・スジック著、生駒芳子訳、マガジンハウス刊)
 「ファッションの20世紀」(ダイヤモンド社刊)
 「イタリアン・ヴォーグ」
 「ファッションと哲学」(アニェス・ロカモラ、アネケ・スメリク＝編 | 蘆田裕史＝監訳、フィルムアート社)
 「ダイアナ・ブリーランド」
 「ファッションが教えてくれること」(板倉徹一郎著、RJカトラー著、映画総合教材)
 「創造する未来」(尾原蓉子著、織研新聞社)
 「ジャポニズム 流行としての「日本」」(講談社現代新書 2506) 新書
 「新ジャポニズム産業史 1945-2020」マット・アルト(著)村井章子(翻訳)

■成績評価基準と方法

田居担当

課題・制作への取組の姿勢(経緯)	50%	参考資料の内容を把握しているか、資料内の重要箇所を質問。
授業内試験等、作品、レポート、プレゼンテーション(結果)	50%	ファッションとアートに対する深い興味と知識を抱かせるために、さまざまな書籍・展覧会を紹介する。 ⇒さまざまな書籍・展覧会を紹介するが、ファッションとアートに対する深い興味と知識を抱いたかどうかをプレゼンテーションで判断する。
外部専門家評価	0%	

生駒担当

課題・制作への取組の姿勢(経緯)	50%	授業中の聞き取り及び理解することへの取り組み、質疑応答、事前の資料の読み込みなど ⇒授業中の聞き取り及び理解することへの取り組み、事前の資料の読み込みなどを質疑応答で判断する。
授業内試験等、作品、レポート、プレゼンテーション(結果)	50%	授業内でのプレゼンテーション、レポートやイメージボードの作成、質疑応答への対応など ⇒時間外で作成されたイメージボードと共に授業内で行うプレゼンテーションによって、判断する。
外部専門家評価	0%	

レポート提出、イメージボード提出。少人数のクラスなので、わからないことがあれば質問を

■研究倫理への取り組み

担当 田居；

大学院とは言え、学生時代に培った価値観や社会への関心、多様性のへの理解、人権への配慮などはその人物の人格形成においても非常に重要と考える。特に留学生の割合が高い大学院では、実際に育った環境も違い価値観も違う可能性のある人間とともに学び話すことで、実際に多様性の重要さを肌感覚で身に着ける機会だと思う。また現代のファッションが、革新性と持続可能性という視点なしには評価されないということを理解、認識し、革新的な精神と責任ある行動をとれる学生を育てるべく指導したい。

担当 生駒；

「倫理」ということに関して言えば、私自身（生駒）は、日本エシカル推進協議会の会長を務めており、エシカル各分野の専門家とともに、エシカルの推進活動を行なっています。この協議会では、エシカル基準を策定しており、8項目にわたる基準を紹介しています。環境問題から人権、動物福祉、地域への貢献など、企業の経営や、個人の消費行動において、より良い社会や地球環境を作るための行動指針を示しております。この基準を、研究倫理にも応用して考えることはできるかと思われます。教える立場と教わる立場の人間関係におきましては、ハラスメントやダイバーシティ、内部告発者の保護など、通常の企業で行われている倫理的な人権的配慮を、教育の現場でも考えることが重要です。また、作品を作る上では、環境に負荷のかかる素材は使わない、CO2 排出を抑える、できるだけ水を使わない、資源を無駄遣いしない、廃棄物を出さない、動物由来の材料はトレーサビリティに注意するなど、さまざま配慮する点があります。また、アートとファッションの接点を考える上で、昨今話題の新たなジャポニスムについても、その源流と現在の動きとを把握しておくべきと考えております。そのような点に関して、指導をしていければと思っております。

■学生へのメッセージ

リアルクローズが溢れる世の中となったいま、ファッションの世界はダイナミックにパラダイムシフトを始めている。いまここで、ファッションの「造形表現」を考察することは、ファッションの未来への道筋に至る鍵を探り当てるきっかけとなるはずである。アートからデジタル、エシカル・ファッション、クラフツマンシップまで、こちらとしては伝えられることはできるだけ伝えたいと思っているので、貪欲に授業に臨んでほしい。 また将来的なことでも一緒に考えることはできるので遠慮をしないで質問、相談を寄せてほしい。
